

Title	感想5(東京夏の学校に参加して)
Author(s)	小川, 泰
Citation	物性研究 (1966), 5(5): 360-360
Issue Date	1966-02-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/85850
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東京夏の学校の感想

感 想 5

小 川 泰（東京教育大理）

今回の様な催しの意義は認めながら、アジア財団の問題と運営面に危惧を感じて若手の署名に参加し、且つ出席致しました。講議内容自身、また各講師の人柄、態度等感銘を受け、fight にみちて帰途につくことができました。しかし上に述べた様な「危惧」に筋を通して若手の申し込み者が少なかつたせいもありましょうが、我々が描いていたイメージとは非常に違つて、若手が少く、むしろ成人教育の方が主であるという感じでした。そんなわけで我々チンピラは何か威圧感を受け、言葉の問題もありますが質問、討論会、気軽に振舞えませんでした。結局、対象についての方針がはつきりしていなかつたのか、変更せざるを得なかつたのか判りませんが、今後は、分野、内容、対象、運営、資金面等 open な討論で方針を決めるべきだと思います。private な企画があつてよいとの意見も成り立つとは思いますが、資金のこともなり、そんなにチョコチョコほうほうでこんな催しができるものではありませんから矢張り public に考えるべきだと思います。

またアジア財団の問題については、「物理学者は探索すべきでない」とのことですが、中国研究者達は、東洋学者として学術学議に貝塚茂樹、山本達郎両氏が招請するという形で「全中国研究者シンポジウム」というものを 1962 年 7 月に開きました。他の学問分野でアジア財団から援助を受けようというには、少くとも彼等が何を論じたかを検討する義務はあると思います。直接我々の活動が左右されることはなくとも、他の分野に於ける影響にまで特に学問、文化全域にまで責任をもつべきであると思います。

兎に角、こじれている若手との間を正す話し合いの機会は是非設け、今後は全研究者の納特の行く形で開くべきだと思います。

感 想 6

大 野 公 男（北大理）

私の主に興味を持つ原子・分子の問題もまさに多体問題であり、最近色々なモダンなテクニクを応用する例も出て来ているので、将来の進路への見通し